

1 人は未知を知ることとはできない

①二昔ほど前、生まれてはじめて「未知の恐怖」を体験したことがある。

長野の善光寺でお坊さんに「真つ暗闇を体験してみませんか?」と聞かれた。「お戒壇巡り」を体験できるとは、願ってもない機会である。早速お願いした。

②内陣の奥の狭い階段を下ると、回廊がある。

入った途端、衝撃を受けた。そこは底のない暗闇だった。

光もない、音もない、匂いもない。視覚も聴覚も嗅覚も働かない。左右も分らない。上下も分らない。前後もあやふや。自分の立ち位置が分らない。空間認識ができない。完全なブラックアウトである。

③唯一の頼りは、壁に触れている手の感覚だけで、それを信じて動く他はない。

一歩進むのも、奈落に落ちるかと不安である。道(?)が迷路になっていたら、どうしよう。出口に無事たどり着けるだろうか。どれだけ続くのだろうか。一步一步不安が募る。気軽に坊さんの話に乗るのではなかった。

④今まで生きた世界は、どんなに暗闇でも、わずかな光があった。たとえ、山里の闇夜でも、薄い光は感じられる。わが半生を振り返っても、漆黒の暗闇を経験したことはなかった。生まれてはじめて体験した光のない世界は、想像もできない異空間だった。

⑤心理学の感覚遮断実験では、人の感覚が完全に遮断されると、それに代わって多くの人は幻聴/幻視にとらわれるという。生まれてこの方、「外界からの刺激が全くない状態」を知らない脳は、それを補償するため幻覚を作り出すらしい。人はない音を聞き、存在しない幻影を見る。

⑥回廊巡りではじめて「未知」を体験したが、それは不気味で、奇怪で、得体が知れなかった。未知という言葉が与える、やや甘美な印象とは全く違った。

生まれてこの方慣れ親しんできた感覚世界が遮断され、漆黒の暗闇の中に放り出された。それは、まさにこの世ではなかった。異空間であった。

⑦2020年初頭に至るまで、われわれは新型コロナがこれほど世界中に蔓延するとは予想し

なかった。しかも、これだけ強力な感染力を持ち、変異を繰り返し、未だ収束の気配すら見せない。異常事態である。われわれは、まさに未知の事象に対峙している。

⑧コロナ禍の経過は、多くの専門家の予測をはるかに超えている。

専門家にとってさえ、生まれてはじめての体験である。今までの経験も常識も通用しない。今後の変化も予測できない。どのように対策すればよいかも分らない。

過去の経験を基にして、未知を知ることができない。

常識も経験もカンも全く頼りにならない。コロナという未知の事象に対峙するためには、今までの常識的なコロナ対策は、存外、的外れかも知れない。

⑨コロナ禍にとどまらず、日本は、今後も続発する自然災害・有事に備えるための新しい考え方を必要としている。「日常の思考」を超えた、全く新しい「非常の思考」を必要としている。

2 迷走する WHO : 科学至上主義の誤り

①漫然と常識論をコロナ対策に適用している悪例がある。

ブースター接種をめぐる WHO の迷走がそれである。

(1) 2021 年 8 月、WHO は「ブースター接種の必要性を裏付ける、確かな科学的根拠はない」と指摘した。

(2) 9 月 8 日には、再び、ブースター接種の一時停止を求める声明を発表。

(3) 9 月 13 日には、WHO の専門家を含む一線の科学者らが論文を英医学誌に発表。

この論文は、「入手可能な証拠では、ブースター接種を広く行う必要性は示されていない」としつつ、「ブースター接種が重い副反応を生じさせかねない」と警告した。

②しかし、すでに 8 月には、製薬大手は「時間がたつとワクチンの効果が薄れるためブースター接種が必要」との立場をとっていた。

米国、ドイツ、フランスでもブースター接種に向けた動きを加速しており、イスラエルではすでに 100 万人以上がブースター接種を終えていた。

③現実がこれほど進んでいるのに、ブースター接種の停止を求めるのは、「感染被害が拡大するまで、接種を待て」というのに等しい。座視しては、接種遅れのため感染が増

え、死者が出るかも知れない。批判を受け、10月になり、WHOは8月の見解を事実上撤回した。

(注) 但し、WHOが(1)重い副反応のリスクがあると警告したこと、(2)開発途上国のワクチン格差の問題を指摘したこと、の2点は傾聴に値する。しかし、それとブースター接種が有効かどうかとは論点が違う。

④上記で引用したWHOのいう「科学的根拠」とか「証拠」は、新聞の用いた和訳なので、原文はおそらく「エビデンス」(evidence)を使っていると思われる。しかし、エビデンスがそもそもどういう意味かははっきりしない。

(注) 日本語では、証拠、根拠、裏付けなど、さまざまに訳されている。厳密には、証拠と根拠では意味合いが違う。「証拠」は事実の有無を確定するため、「根拠」は主張の是非を判断するために使われる用語である。

但し、状況証拠(circumstantial evidence)という概念もある。これは「証拠」ほどの強い証明は要らないが、「一応の根拠」があれば証明があったと取り扱うものである。

このように日本語の「エビデンス」は、性質の違う概念をひとくくりにした曖昧な言葉である。

⑤この点はさておき、ブースター接種が有効か否かのデータを集め、それを解析するには時間がかかる。その間、事態は進行する。エビデンスの集積に時間がかかり、その間に悲劇が起きては取り返しがつかない。エビデンスがはっきりしてから、初めて手を打つのでは遅すぎる。科学は万能ではない。科学は遅れてやってくる。

⑥追加接種をするかしないかは、その時々状況のひっ迫しだいである。

ブースター接種が有効だとする証拠がなくとも、未知の危険に備えるために接種するという判断は十分あり得る。

「ブースター接種を認めるためにはエビデンスが要る」というのは科学至上主義の誤りである。事態が不明でかつ流動的なときに、エビデンス論を一律に適用するのは「日常の思考」の呪縛に囚われた判断である。

⑦科学的アプローチがあらゆる事象に適用できるわけではない。世の中には、科学を適用できる事象と、適用できない事象がある。

例えば、インテリジェンス(情報/防諜)の分野では、憶測や噂も、最終判断を下す一資料となる。未確認情報さえ、いや未確認だからこそ、貴重な判断資料になる。

日本は戦略の立案や判断に際してエビデンス(裏付け)のある情報を重視するが、

経済安全保障におけるインテリジェンスの考え方が違う。

事実や憶測、噂を含めた情報を基に不透明な未来に判断を下すのがインテリジェンスだ（ルール形成戦略研究所所長・国分俊文多摩大院教授。2021年4月18日付け日本経済新聞）。

⑧科学的アプローチの呪縛を引きずって、迅速な対策に失敗したのが、気候変動をめぐる争いである。

今年8月のIPCC（国連の気候変動に関する政府間パネル）は、「人間活動の影響がなければ、温暖化は事実上起こりえなかった」と結論づけた。それまで長い間、人間活動関与説は「蓋然性の高い仮説」に過ぎなかった。この報告によって、人間活動関与説がほぼ確定した。

⑨ここに至るまで30年以上の年月がかかったのは、温暖化の原因として人間活動以外に数多くの要因があり、人間活動関与説には「エビデンスがない」とする反論が優勢だったからである。目前に温暖化の危機が迫っていても、人間関与の証拠がないとする反論を説得しきれなかった-論理的にも感情的にも。

⑩もちろん「温暖化の原因の証明はできなくとも、人間関与が疑われる限りでできる限りの対策をしなければならない」とする考えも有力だった。温暖化がもたらす極大のリスクを座視することはできないからである。

しかし、科学至上主義の前には、無力だった。こうして実効的対策はなされず、今や人類は現代社会壊滅のリスクに直面している。

（注）未知の災害に備えるためには、学問/知識は却って害になることが多い。過去の経験を引きずって、新しい事態に対処するからである。コロナ禍が始まった当時「コロナもインフルエンザに毛の生えたようなもの」と主張した一部の専門家（？）がいたが、彼らは手あかのついた常識で未知の未来を読むという誤りを犯したのである。

3 日常の思考と非常の思考

①スケールは違うが、コロナ禍対策にあたっても、エビデンスを重視するか、危機対応を重視するかの対立が陰に陽に見られる。

例えば、「（五輪などの）イベント開催による危険が証明されない限り、活動は自由」とする意見と、万一にも感染が拡大する場合の危険を重視して、「証明されなくとも、危険があれば強力な対策をとるべき」とする意見である（前者は「日常の思考」、後者は「非常の思考」）

の一適用例である)。

(注)本来なら、活動を推進する側が「諸活動を行っても危険がない」と証明すべきであり、「危険が証明されないから、活動は自由」なわけではない。しかし、立証責任の転換の問題はあまりに講学的になるので、ここでは触れない。

②「日常の思考」とは、感覚的、常識的、ムード的に物事を決める思考法をいう。

例えば、Go to キャンペーン、五輪開催、各種イベントの制限緩和に見られるように、何となく場の空気で物事が決まっていく。企画を実施する利害得失を比較検討することもなく、決定過程も不透明なまま流れが決まる。短期的/近視眼的思考である。

③「非常の思考」とは、論理的、俯瞰的、理知的に物事を決める思考法をいう。危機対策、特にテールリスク対策に有効な思考法である。

(注) テールリスクとは「起きる確率は非常に低くとも、起れば巨大な損害をもたらすリスク」をいう。

テールリスクといってもピンとこないが、事例は多い。主な例では、戦後の(預金封鎖と財産税課税による)私有財産の没収、リーマン・ショック、気候変動などがある。いずれも、その危険が指摘されながら、肌身で危険を現実のものと覚めることができない。いわば絵空事だから、問題は先送りされる。しかし、それは現実にも多発している。

④「日常の思考」では、コロナ対策にあたっても、経済活動の再生が優先する。その延長上にはじめて感染予防対策を決める。人間側の都合が、対策を決める最も重要な要素となる。これに対し「非常の思考」では、感染予防のための理想的な対策をまず検討する。人間側の都合や感情や利害は一旦脇において、理想的なウィルス対策を考える。その上ではじめて、理想策が実現可能か否かを検討し、修正を加える。

(注) 感染症や災害などの自然を相手に、情緒や感情は無力である。人間的な反応を抑え、どこまで自然(コロナ)に即した策を取るかが、被害を最小にするポイントになる。「人間の事情を優先する対策は、長期的に却って被害を増大させる」とわたしは考える。

⑤2つの考え方には違いがないように見えるが、出発点が違うだけに、個々の対策には大きな違いが出てくる。

ブースター接種の間隔期間の決定、ワクチン獲得のタイミング、五輪の開催、Go to キャンペーンの実施、各種イベント開催の制限、営業自粛要請の是非、在宅勤務比率の向上、緊急

事態宣言の実施と解除のタイミング、ロックダウン法制の導入など、あらゆる面で判断が違ってくる。

「日常の思考」に囚われ過ぎると、決定は遅れ、小出しで、生ぬるい。

⑥しかし「非常の思考」が本当に日本で根づくか？

日本人の経済再生への思い入れの強さや、欧米での市民生活規制に反対する運動の強さを見ても、当分は無理だろうというのがわたしの印象である。

規模は違うが、気候変動対策と同じ失敗をわれわれは繰り返すのではないか。「非常の思考」は理想的であっても、まだ現実的ではないかも知れない。

⑦人間はコロナウィルスを制御できない。ただ、コロナに適応することができるだけである。自然と人間の相互干渉の歴史を見れば、それは自明である。

画期的なワクチンや飲み薬が開発されれば別だが、コロナ禍がこれからどう展開するか、いつ終焉するのかは、当面、コロナしだいということになるだろう。

わたしは日本政府の今後の対策についても極めて悲観的である。場当たりの対策に終始し、その背後に何らの哲学も思想も感じられないからである。